

登場人物

土井二雄（どい ふみお）

大学二年生。空手部所属。

平常時 9.7 センチ、勃起時 23.8 センチのずる剥け。しこり過ぎで黒ずんだ亀頭。

御園明子（みその あきこ）

大学二年生。

土井二雄の彼女。肉体関係あり。

笠松（かさまつ）、西井（にしい）、早島（はやしま）、

土井二雄の友人。

学生課課長

土井二雄が通う大学の学生課課長。巨根を理由に二雄を性的に辱める。

第一話 年齢確認チンポ測定

買い物かご一杯に缶チューハイやおつまみを入れて、土井二雄はレジに並んでいた。今日は、シェアしているアパートで大学の友人たちとの宅飲みの日で、買い出しに来ているのだ。

夕方ということもあり、酒屋はほどほどに混んでいた。

ただ並んでいるだけでも暇なので、二雄はスマートフォンを操作し始めた。

恋人である御園明子から届いた「今度のデートで着ていく服、どっちがいいかな？」というメッセージを確認した。

文雄は明子に惚れ込んでおり、どんな服装をしていても心を惹かれる自信がある。

だから、メッセージに添えられた茜色のワンピースの写真と白のブラウスに紺のスカートの写真のどちらがよいか、という質問は難問であった。

しばらく悩んでいる間に、レジの列が進んでいく。

次にレジを通過できるので、二雄は「どちらも可愛いから、明子の好きな服を着てくればいいよ」と返信した。

デートのことを思うと、二雄はドキドキしてくる。

恋人である明子とは既に何度か肉体関係を持っている。

初めての彼女である明子と交際が長続きしているのは、肉体の相性も大きいのではないかと、思うほど、二雄は明子に惚れ込んでいる。

あ、やばい……

二雄は慌ててズボンのポケットに手を入れて、勃起し始めた己のチンポを誤魔化した。

自慢ではないが、二雄のチンポは大きい方だ。

少なくとも、二次性徴を迎えた中学生以降、父親も含めて自分より大きなチンポを見たことがないほどだ。

平常時は9.7センチメートル、勃起時は23.8センチメートルで、どうしてそこまで詳細にサイズを知っているかという、自分で計測したことがあるからだ。

高校生時代には「このサイズじゃ一生童貞だよな」とプールの着替えの時に揶揄われ、毎晩チンポを計測しながらこれ以上大きくなってくれるなと祈っていたのだ。

幸いなことに明子は二雄を受け入れられる女性であった。

二雄は、特技である空手で企業に就職し、明子との交際を深めていきたいと考えている。

気が早いかもしれないが、いずれは結婚もしたいと想像している。

そんなことを考えているうちに、二雄の番になった。

「年齢確認にご協力をお願いします」

店員に声をかけられ、二雄はおや、と思った。

この酒屋は何度も利用しているが、年齢確認を求められたことは初めてであった。

二雄は自慢ではないが、老け顔だ。

高校生時代には貫禄があると言われ、学生証を提示しないと高校生と認識してもらえないこともあった。

その上、大学生になった今は、体毛も濃くなり、空手で鍛え上げられた逞しい肉体と相まって、熊のような雰囲気と言われることが多い。

そんな己が年齢確認を、というのは、だから意外だったのだ。

二雄は財布から学生証を取り出し、提示した。

「申し訳ありませんが、巨根のお客様の年齢確認はチンポの提示のみとなっております。
チンポをご提示ください」

……

二雄は店員が何を言っているのか、理解できなかった。

声は聞こえた。音も認識した。だから、文章としても把握している。

けれど、意味が分からない。

「お手数ですが、巨根のお客様の年齢確認にはチンポのご提示をお願いしております」

店員に重ねて要請され、二雄は戸惑った。

夕方の酒屋には、仕事帰りのガテン系や主婦など、老若男女問わず多くの客で賑わっている。

そんな中で、チンポを露出してください、と言われても、露出狂の気のない二雄にはハードルが高すぎたのだ。

「おい、兄ちゃん。

酒を買える年齢なら、チンポぐらい見せられるだろ」

「チンポの提示なんて、常識だろ。

早く見せろよ、巨根野郎」

「私も暇じゃないのよ。

早くして頂戴な」

「チンポをもっこりさせておいて、短小とか嘘をつくなよ」

レジに並んでいた客たちが次々に、二雄にチンポを提示するよう求めてきた。

二雄は混乱した。

いつから、巨根の客の年齢確認にチンポを提示する義務が生じるようになったのか、とか当然の疑問が頭の中で乱反射する。

けれど、レジに並んだ客たちは二雄がチンポを提示しないことに不満そうであった。

店員も、チンポを提示しようとしないう二雄に困った様子だ。

二雄は諦めて、ズボンのベルトを緩めた。

そして、ズボンのチャックを下ろし、ブランドの黒ブリーフと一緒に一気に下ろした。

二雄は恥ずかしさで顔が熱くなった。

公衆の面前に己のチンポを晒したのだ。

まともな神経ならば、恥ずかしくならぬはずがない。

二雄の金玉はずっしりと垂れさがっており、毛も生えていて、二雄の男性ホルモンと性欲の強さを物語っている。

二雄の陰茎は常人の陰茎に比べて太く、その代わりに雁首はそれほど目立たない。

亀頭は旺盛な性欲をオナニーで発散させ、明子とのセックスでは何度も達しているせいか、黒々としており、成熟した雄の風格を漂わせていた。

「では、年齢確認のために完全に勃起させてください」

「勃起ですか……」

店員が当然のように勃起、と言うので、二雄は思わず問い返した。

「ええ、勃起です。

当店で、巨根のお客様の年齢確認にはフル勃起チンポを年齢計測器にかける規則となっておりますので、ご協力ください」

店員の言葉に、揶揄いなどの様子はない。

どうやら、本気で勃起させろ、ということらしい。

「おいおい、大人チンポなら勃起ぐらい余裕だろ」

「私、急いでるのよ。

もったいぶらないで早くして頂戴」

「それともその若さで不能なのか？」

レジに並んだ客たちが次々に二雄に勃起を要求する。

二雄は諦めて、己のチンポを握りしめ、扱き始めた。

とはいえ、露出狂の気のない二雄にとって、公衆の面前でのオナニーは難易度が高すぎる。

チンポを晒している現状でさえ、恥ずかしさで心臓が張り裂けそうなのに、シコシコしている己が情けなくて仕方がないのだ。

そんな気持ちがチンポにも伝わっているのか、幾ら扱いても二雄のチンポは勃起の気配すらない。

客たちのざわめきに苛立ちの様子を感じ取った二雄は勃起させようと必死にチンポを扱いた。

強面の熊面の男が、勃起させようと必死にチンポを扱く様子は滑稽なものであった。

「そーれ、勃起！ 勃起！」

「チンポピンピン物語！」

「ギンギンにするのよ！」

客たちも二雄を囁し立てる。

客たちの言葉の一つ一つが二雄の羞恥心を煽り、勃起の難易度を上げているのだが、責任感の強い二雄は、客たちに囁し立てないでくれ、とも言い出せなかった。

それでも二雄のチンポは勃起しようとしなない。

二雄は、心の中で恋人である明子に謝罪をした。

これから、明子の痴態でオナニーをすることへの謝罪をした。

そして、明子の肉の柔らかさや、倒錯的な体臭、秘奥の絡みつきなどを思い出しながらオナニーを続ける。

明子との愛の思い出は効果が抜群で、二雄の手の中でチンポがどんどん大きくなる。

二雄の手からチンポが零れ、より太く、より長く、より硬くなる。

そうして、二雄はチンポを完全に勃起させた。

完全に勃起した二雄のチンポは棍棒のようであった。

常人よりも太い陰茎は、手が大きな二雄をもってしても片手では握りしめられないほどであり、血管がグロテスクに浮き出ている。

黒ずんだ亀頭もパンパンに膨れているのだが、雁首の高さはそれほどでもない。

その代わりに陰茎が太く、高校生時代に、「この大きさじゃセックスは無理だな」と揶揄されるのも当然の威容であった。

「勃起させました」

二雄が店員に申告すると、店員が露骨に困った顔をした。

「お客さん、ちょっと、これはチンポでかすぎですよ。

こんなにでかいと正直なところ、迷惑なんですよね」

「ああ、確かに、こりやでかすぎるわ」

「少しは遠慮ってものを知ってもらわないとね」

「慎みってもんが足りないな」

店員の言葉の後を継いで、客たちが二雄のチンポについて酷評をする。

勃起させると言うから勃起させたのに、店員や客たちの余りの言い草に二雄は頭が真っ白になった。

「ええとね、これが年齢計測器なんですわ」

店員が半透明のオナホにしか見えない器具を取り出した。

長さは二雄のチンポよりやや短く、二雄のチンポが収まりそうにない。

「年齢計測器は、勃起チンポを挿入して計測するんですけどね、お客さんのチンポじゃほら」

店員が二雄の勃起チンポに年齢計測器を並べた。

年齢計測器は二雄の勃起チンポよりやや短く、挿入する分を考えたらどう考えても長さが足りない。

「どう見ても入らないでしょ？」

これ、標準サイズじゃなくて、ラージなんですよ、ラージ。

22センチメートルにまで対応できる特別品。

その分高いわけですよ。

それなのに、これじゃあねえ」

店員が露骨なため息をついた。

二雄は望んで巨根になったわけではないので、己のチンポをこのように蔑まれては恥ずかしさで震えることしかできない。

「ちょっと、近所の店に頼んで、規格外チンポに対応した特注品を持っていないか確認してみますから、そのままで待っていてもらえますか。

全く困ったなあ」

そういうと店員が二雄の買い物かごをレジの奥に置き、別の店員を呼んでレジを交代した。

「あー、こりや確かに長すぎるね」

「大きければいいってもんじゃないのよ」

「エロ漫画の読み過ぎじゃないかしら」

「太さも極悪だし、こんなのでセックスとか拷問だよな」

レジに並んだ客たちが二雄のチンポを笑いながら揶揄する。

二雄は顔を真っ赤にして俯くことしかできない。

「それがさー、うちにメガ巨根の客が来て、ラージサイズの年齢計測器が使えないのよ。

で、特注品で持ってない？」

持ってないかー、そっかー、忙しい時にごめんね」

二雄の年齢を確認すると言い出した店員も、あちこちに電話をかけながら手配をしているようだが、二雄のチンポが大きすぎるせいで、上手くいかないようだ。

己のチンポが挿れられ、店員に迷惑をかけている現状に二雄は冷や汗を流し始めた。

自分の巨根が迷惑をかけているのだと考えるだけで、動悸が乱れる。

二雄は勃起チンポを露出し続けている現状を抜け出したいという思いもあり、早く特注品の年齢計測器が見つかってほしい、と祈った。

「あのさ、店員さん」

スーツを着た男性の客が電話をかけている店員に声をかけた。

「探しているところ、悪いんだけどさ、国内品でこのデカチン田フトマラを計測できる年齢計測器はないと思うよ。

国内製造の年齢計測器の対応限界は直径4センチメートルだけど、ほら、このデカチン田フトマラ、陰茎の直径が5センチメートル越えてそうだし」

「そうなんですか」

「ええ、うちは年齢計測器のセールスを取り扱っているから分かりますけど、ちょっと、このデカチン田フトマラは規格外で想定外。

図々しい巨根にも程があるというかなんというか」

デカチン田フトマラと何度も挿れられることに二雄は屈辱を覚えた。

だが、己の巨根が店に迷惑をかけているのも事実なので、反論することはできない。

「参ったな、それじゃあ年齢確認ができないじゃないか」

「大丈夫ですよ。

精液臭気式計測器がありますから」

せいえきしゅうきしきけいそくき？

セールスマンの言葉を二雄は脳内で反芻した。

「先週、発売したばかりの商品なんですけどね、ザーメンの臭いで年齢を確認できるんですよ。

車に試供品がありますから、持ってきてみましょうか？」

「ええ、ぜひお願いします」

電話をかけていた店員がセールスマンに頭を下げたので、二雄も「お願いします」と頭を下げた。

「あらまあ、国内品だと直径5センチメートル越えのチンポは計測できないのね」

「そりゃ、直径5センチメートルなんてフトマラもフトマラですしね」

「しかし、直径5センチメートル越えかー、淫乱どチンポですな」

「セックスする相手への負担も大きいでしょうに」

レジに並んだ客たちが二雄のチンポの直系についてざわつく。

その好奇心に満ちた言葉の一つ一つが二雄の恥辱を煽る。

二雄だって、望んで巨根に育ったわけではないのだ。

奇異の目で見られ始めた高校生の頃は、毎晩チンポを計測して、これ以上大きくなってくれるな、と祈っていたほどなのだ。

それをこのように挿れられて、プライドが傷つかないわけがない。

セールスマンが箱を持ってレジまで戻ってきた。

「お待たせしました。

これが、精液臭気式年齢計測器ですよ。

試供品だから、お代は気にしないでください」

セールスマンが箱から注射器に似た道具を取り出した。

「この器具でザーメンの臭気を採取して計測するんだけど、ここにザーメンを受け止めてほしいわけ」

セールスマンが精液臭気式年齢計測器の蓋を回して取り外し、二雄に差し出した。

「では年齢確認のため、ここにザーメンを入れてください」

「分かりました」

二雄は蓋を受け取ると、酒屋のトイレに向かおうとした。

「ちょっと待ってください。

不正防止の観点から、この場でザーメンを提供してください」

「え？」

店員に引き留められ、二雄はぎょっとした。

この場で、ということは、衆人環視の中で射精をしろ、ということか。

二雄は露出狂の気はない。

巨根コンプレックスということもあり、同年代の男性相手にチンポを見せる経験も少なく、巨根を揶揄われることが目に見えているので、猥談に参加したことも少ない。

そんな二雄が、老若男女でごった返す酒屋のレジの前でオナニーをしろ、というのはあまりにもハードルが高い。

「まさか、未成年なのを偽っているのではないですよ？」

「成人しているなら、この場でザーメンを出すぐらい、余裕でしょ？」

店員とセールスマンが二雄を追い詰めていく。

「そうだそうだ。

巨根なんだから、ザーメン出すぐらい余裕だろ？」

「景気よくピュッピュしなさいな」

「未成年のくせに酒を買おうとしてないって身体で証明しろよ」

レジに並んだ客たちも二雄にこの場でオナニーをして射精をしろと迫ってくる。

逃げられない。射精するしかない。

二雄は覚悟を決めた。

大きな手で己の勃起チンポを握ると目を閉じた。

視界の情報を抑制することで、衆人環視の中でオナニーしているというストレスを少しでも緩和したかったのだ。

そして、心の中で、公開オナニーのオカズにすることを明子に詫びながら、明子とのセックスを精緻に思い出した。

乳房を揉んだ時の明子の表情。

フェラチオで奉仕する明子の舌使い。

秘奥を舐めた時の明子の臭い。

秘奥に挿入した時の明子の切ない声。

明子を思いながら、二雄はオナニーをする。

ギンギンに勃起した二雄の鈴口から我慢汁がにじみ出る。

大きな手を前後に動かすたびに、痺れるような快樂が腰の奥から全身に広がっていく。

「ふう……はあ……ふう……はあ……」

二雄はどろっとした吐息を漏らし始めた。

己が公衆の面前でオナニーをしているという現実はしんどかったが、これも年齢確認のためなのと思えば仕方がない、と己に言い聞かせる。

だが、レジに並んだ客たちは、二雄の心など理解していないし、する気もない様子だ。

「仕方がないとはいえ、この場でオナニーできるなんて、巨根だと変態になるのかしら」

「おいおい、それは全国の巨根に失礼だろ。」

このデカチン田フトマラが特別性の変態なんだよ」

「おい、デカチン田フトマラ！

気分出してるんじゃねーよ」

「ザーメン！ ザーメン！

早くザーメンぶっ放せよ！」

客たちがオナニーに耽る文雄を囁し立てる。

目を閉じていても、耳を閉じることはできないため、客たちの言葉の一つ一つが二雄の心を踏みにじっていく。

それでも、二雄は必死に明子の痴態を思い出しながらオナニーを続ける。

年齢確認で迷惑をかけた居酒屋で、これ以上、己のことで時間を取らせないために、必死に手を動かす。

二雄の心は男の秘め事であるオナニーを披露している現実には傷ついていたが、二雄の身体はオナニーの快楽を享受し始めた。

男の身体は快楽に弱くできているので、チンポを扱けば感じてしまうのは決して罪ではない。

けれど、二雄の倫理観は感じている己を仕方がないと断ずることはできなかった。

客たちが囁し立てるように、己に変態性が眠っていたのではないかという疑念が芽生え、プライドを傷つけていく。

それでも、二雄の身体は快楽に反応を示していく。

二雄の吐息はねっとりとしてくる。

鈴口から溢れた我慢汁はぬとぬと二雄のチンポを淫らに彩っていく。

二雄の表情は公開オナニーへの恥ずかしさから、オナニーの気持ちよさに染まっていく。

二雄は軽く膝を曲げて腰を前後に動かし始めた。

淫らな動きに合わせて逞しい胸が上下する。

「ああ……くう……ふう……はあ……」

二雄の口から漏れる吐息に淫らな熱が増していく。

「おうおう、感じてるじゃねーか。

公開オナニーでチンポビンビンってか」

「変態巨根野郎！

さっさとザーメンぶっ放せ」

「まったく、私だったら見られながら射精するなんてありえないね」

「ザーメン！ ザーメン！」

二雄の興奮を感じ取った客たちによる二雄への煽り立てもエスカレートしていく。

二雄の顔や腕、露出された下半身を汗が濡らしていく。

二雄の口が開かれ、舌の蠢きが露わになる。

見られていて恥ずかしいのに、気持ちいい。

相反する思いが二雄の快樂に彩りを添えていく。

腰の奥から熱い熱を感じ、二雄は手の動きを加速させていく。

我慢汁を己の手でチンポに塗り込め、喘ぎ声も加速させていく。

「あ……おああ……くそ……イイ……」

二雄は熱っぽく喘ぎながら腰を大きく前後に動かす。

絶頂に近いことが誰の目にも明らかであった。

二雄の妄想の中でも、二雄は絶頂に近づいていた。

現実に二雄のチンポを包んでいるのは己の手であるが、妄想の中では明子の秘奥であった。

明子が熱っぽい声で懇願し、足を絡め、表情で二雄を燃え上がらせる。

「出すぞ……出すぞ……ぶっ放すぞ！」

二雄は妄想の中の明子を蹂躪するべく、野太い声で宣言した。

年齢確認のために、精液臭気式年齢計測器の蓋を亀頭に押し当て、思いっきり腰を前に突き出す。

ドッドドッドドピュ！

急き立てられた二雄のザーメンが機関銃のように激しく精液臭気式年齢計測器の蓋に打ち付けられる。

計測するまでもなく成熟した雄であることが明らかな濃厚な雄の臭いが酒屋のレジ周辺に広がっていく。

蓋の半分ほどまで二雄のザーメンが満たした。

射精を終えて冷静になった頭が、ここは明子との寝室ではなく、酒屋のレジ前であることを二雄に強く認識させる。

二雄は目を開けた。

客たちや、店員たちが公開オナニーを終えた二雄を、変態を見るかのような厭らしい表情で見ている。

彼らの表情に、二雄は己がした変態的行為のおぞましさを思い知らせる。

「デカチン田フトマラだけあって、随分一杯出したね。

見られると感じるタイプなのかい？」

セールスマンが二雄の手から精液臭気式年齢計測器の蓋を受け取りながら、にやりと笑った。

二雄はオナニーを披露してしまった恥ずかしさから、鼓動が乱れ、何を言えばいいのか、いや、何か言った方がいいのかの判断もつかなかった。

セールスマンが蓋を精液臭気式年齢計測器に戻し、計測を始める。

しばらくして、精液臭気式年齢計測器が小さく電子音を鳴らした。

「計測完了。二十歳だね。

いやはや、この若さで露出狂オナニストとは、デカチン田フトマラくんほど変態だね」

セールスマンが二雄にいやらしい笑みを向けてきた。

「お酒を買うためにザーメンピュッピュするなんて、本当に変態野郎だな」

「見られながら射精して気持ちよかったか」

「自慢のフトマラを見てもらってありがとうございますって言わないのか」

レジに並んだ客たちが口々に嘆かれる言葉の一つ一つが泥玉のように二雄の気持ちを惨めにさせていく。

「お客さん、デカチンを見せびらかしたいのですが、もう年齢確認は終わっていますし、しまってくださいよ」

店員に言われ、二雄は慌ててズボンと黒のブランドブリーフを引き上げた。

布地がぬとっと張り付く感触に二雄は射精したあと、尿道に残ったザーメンを絞り出していなかったことを思い出した。

気が付いてしまうと、尿道の中に残ったザーメンや、それが鈴口から漏れてブリーフにくっついている不快感などで落ち着かない気分になるのだが、まさか、この場で再びチンポを出してザーメンを絞り出すわけにもいかない。

二雄がオナニーを披露したのは、年齢確認のためであって、気持ちよくなるためではないのだ。

とはいえ、射精を終えたチンポが萎えるにしたがって尿道内に残されたザーメンが押し出される。

そうすると、ブリーフにザーメンの染みが広がり、亀頭に布地が張り付いて気持ち悪い。

酒屋のトイレに行こうか、とも考えたが、チンポどころかザーメンを発射するところまで見られた店員や客たちの目線から逃げ出したい、という思いもあった。

それに、そもそも、酒屋に来た目的は友人との宅飲みの用意だ。

年齢確認オナニーで時間を食ってしまったし、待たせるのも問題があるだろう。

それに、家に帰れば替えの下着がある。

となれば、さっさと帰る方がいいだろう。

「合計で11480円となります」

「はい」

何事もなかったかのようにレジの仕事に戻った店員の請求に二雄は財布からお金を取り出した。

店員の顔を見ることは恥ずかしくてできず、トレイに視線を集中させてお釣りを受け取った。

そして、エコバッグに缶チューハイなどを詰め込み、足早に馴染みの酒屋を後にした。

歩くたびにザーメンに汚れた黒ブリーフがチンポに張り付いて気持ち悪い。

早く部屋に戻って着替えよう。

それだけを考え、二雄は帰宅の途についた。

奥付

『セクハラッシュ巨〇空手部員』より「年齢確認チンポ測定」

初出：2020年11月30日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep